

マクドナルドの スーパーコンビニエンスは、 止まらない。



新しいベンリと、新しいおいしさと、新しい楽しさで、
新しいSmileをつくりたい。

1955年、Speed of Serviceを原点に、アメリカで誕生したマクドナルド。その歩みは、レストランの常識を塗り替えつづける「スーパーコンビニエンス」の歴史でした。テイクアウト専用だったハンバーガーをレストランスタイルでご提供したり、「ドライブスルー」や「ブレイクファストメニュー」をご提案したり、今では「おいしさできたてサービス」や、「24時間営業」を。そして近い将来には、ケータイやインターネットを使った新サービスもはじまります。私たちがつくりたいものは、けっしてハンバーガーだけではありません。それは、ワクワクするような新しいライフスタイルや、それを楽しむ人たちのSmileだから。マクドナルドのスーパーコンビニエンスは、これからも進み続けます。



日本マクドナルド株式会社

http://www.mcdonalds.co.jp



お待たせしない クイックサービス

まず、お渡しするまでの時間を短くすること。それが、スーパーコンビニエンスの基本です。今日もクイックで正確なサービスで、ご注文のメニューと、Smileを、おとどけます。



おいしさできたて Made for You

マクドナルドでは、一つひとつご注文をいただいてから作り始めること、ご存じでしたか？それは、スピードアップと真心を両立させた「Made for You」というシステムです。



24時間うれしい ドライブスルー

スマートに時間や手間が省けるドライブスルーは、じつはマクドナルドが最初に始めたサービス。そのベンリさは今、真夜中も動く人のための24時間営業へと広がっています。



一日を楽しくする 新しいおいしさ

新感覚の朝食「マックグリドル」や、ランチにニュースを届ける「期間限定メニュー」や、スナックタイムが楽しくなる「マックフルーリー」。一日のスタイルがちょっと変わる、新しいおいしさをご提案します。

083の謎

本誌名はご想像のとおり、2008年3月から変わる下関市の市外局番に由来しています。しかし、下関市は3個の数字だけで示せるほどモノトーンな街ではありません。だから「うみ やま たいよう」というサブタイトルが、おのずと生まれました。05年2月の旧下関市と旧豊浦郡4町との合併により、新生・下関市は港町代表的なイメージに加えて、豊かな山里も合体したのです。海あり山ありならば、それを照らし出してくれる太陽の本格的な出番！ 本州西端、「うみ やま たいよう」をめぐるドラマの主人公は読者の皆さんです。

ゼロハチサン

『083』創刊号

うみ やま たいよう

2007年11月30日発行

編集人=福田章

編集委員=内田宗治

表紙イラスト=リリー・フランキー

装丁=リリー・フランキー

デザイン=工藤亜矢子 伊藤悠(オムデザイン)

イラスト=稲葉智美(マウス)

発行=下関市

〒750-8521

山口県下関市南部町1番1号

☎0832-31-2951(総合政策部広報広聴課)

制作統括=(株)電通九州

印刷=凸版印刷(株)

協力=下関市の皆さま

アドバイザー

下関フィルム・コミッション 常任委

員長 富永洋一

九州芸術学館山口校 代表 伊東丈年

本誌記事・写真・イラストの無断転載を禁じます

次号予告(2008年3月31日発行予定)

「橋」づくし

逆巻く水の上、ひたひたと満ちてくる潮の上
涙した橋、胸を張って歩いた橋……

そんなドラマをのせた人生の架け橋を渡る



関門橋

◇アンケート

『083』は今これを手に取られたあなたのための情報誌です。つねに深い眼差しを心がけて、皆さまの役に立つ情報を、ワンテーマ方式で下関市から発信してまいります。創刊号についてのご感想、及び今後特集してほしいテーマやとっておきのお知らせなどを、綴じ込みハガキでお寄せください。

編集後記

プロの編集者の方々に来関いただき、初めての編集会議を開いたのが7月。その席で「市として、できる限りたくさん下関の情報を提供します！」と意気込んだのを思い出します。確かに情報は提供できたかもしれませんが、でも、リリーさん、地井さん、町田さんは、その情報から感じたことを「オリジナルの色」で表現してくださいました。取材に同行する中、感じることの楽しさを教えてくださったスタッフの方々、協力していただいた市民の皆さまに感謝します。083は、下関をガツンと、またじんわりと主張してくれるはずです。(Y)

地井さん、町田さん、それに取材スタッフや市の担当者10人ほどの中で、一番走ったのは地井さんです。地井さんが一番年配です。「あっちの風景、ドラマのロケにいいね、向こうから歩いてくるから撮ってよ」と地井さんは、上り坂を走りだします。「あっ、そんなに向こうまでいなくても大丈夫です」とカメラマン。二番目の年配が町田さん。猛暑の取材日、町田さんの早歩きには、みんなついていけず、先頭集団から遅れたマラソンランナーのように、取材スタッフが、必死に続きます。「そうか、年を重ねれば、あんなに元気になれるのか、よし、なるぞ」と前向きに思いはじめられるほど、おふたりから、力をいただきました。(U)

5月以来、本誌創刊に向けて、何度も関門海峡を渡らせていただきました。その時の気分でいろいろな交通手段を使いました。それにつけて思うのは、下関市の絶妙なロケーションです。旅情や郷愁とは、この街のためにある言葉ではないか。九州の島育ちで、今は高原の町に住んでいる私が、再び海に回帰するとすれば、下関を選びそうです。風情と活気のある居酒屋が点在しているのも気に入りました。今後、本誌を編集制作しながら、街の過去を拾い、未来を探っていきたいと思います。(F)